（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

２０２３年度（令和５年度）学校評価自己評価表

松永中学校区	校番　１４	福山市立松永中学校
	最終更新日	2024 年（令和６年）２月 20 日

Ⅰ　福山市

ミッション　福山に愛着と誇りを持ち，変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン　「福山１００ＮＥＮ教育」の基本理念のもと，各中学校区・学校が「２１世紀型“スキル＆倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し，日々の授業を中心として評価・改善を進めながら，子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

・評価はすべての学校で「十分満足できる」「おおむね満足できる」と評価された。
・評価指標は数値だけでなく，子どもの実態を考慮して評価したほうがよい。
・ICT 教育では効果的な学習方法の研修を今後進めていってほしい。

児童生徒の現状

・全国学力調査では，全国平均を下回っている。低学力の子どもが多く，学力定着に課題がある。
・同調査の「意識調査」ではほとんどの項目で全国平均を上回っている。「やっている」と「できる」の認知の差がある。
・挨拶ができる子どもが増えてきた。校区で取組んだ成果が見えてきた。

育成する力（21 世紀型“スキル&倫理観”）	【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】
めざす子ども像（義務教育修了時の姿）	・確かな学力を身につけ，自ら進路を切り開く子ども ・自己肯定感が高く，社会に貢献できる子ども
中学校区として統一した取組等	・「主体的な学び」の授業づくりに取組み，学力の向上を図る。 ・「自己表現」「あいさつ」に取組み，自己肯定感の向上を図る。 ・「自分で選び・決める活動」に取組み，自己形成力の向上を図る。

Ⅲ　自　校

ミッション

地域社会で活躍し，その発展に寄与することができる知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。

学校教育目標

主体性と自己肯定感を育み，社会で通用する生徒の育成

現　状

＜児童生徒＞
○生徒会を主体としたあいさつ運動を展開することで，あいさつに対する意識が向上している。
○生徒が主体となり生徒指導規程の改定を行うなど，主体性が身についている。
●不登校の生徒が増加傾向にある。（スマートフォン，ゲーム）

＜授業＞
○自己表現活動を目標とした生徒主体の学びの授業改善を進めた結果，全国学力定着状況調査の記述式問題に学力向上の伸びが見られた。
●生徒が実感している学習の状況と指導者側が体感している学習実態とが一致していない部分があり，学力の定着に結び付いていない状況がある。
●授業の中で「話す」「聞く」「書く」「読む」の活動が日常生活と関連付けができていない。また授業の中で正確に読み取る力や表現力に課題が見られる。

育成する力（21 世紀型“スキル&倫理観”）		【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】
めざす子ども像		・自ら考え学ぶ意欲的な生徒 ・主体的に活動し，自ら成長する生徒 ・豊かな心を持ち，地域から応援される生徒
研究	テーマ	「自ら考え学び表現できる授業」の創造 ～ 学力向上に向けた主体的な授業・ICT の活用 ～
	主内容等	国語・社会・数学・理科・英語
めざす授業の姿		【知識・技能】 学習内容を文章で語彙力豊かにまとめることができる 【思考力・判断力・表現力】 生徒が自己表現活動を通して課題解決を行おうとする 【主体的に学ぶ力】 興味･関心･意欲を持って課題を見つけるとともに，学習内容が日常生活に結びつけられる 【自己形成力】 自己評価・他者評価を通して，生徒自身が学習内容の定着が確認できる

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日） □指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	最終評価（2月末） □指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
2	自ら考え学ぶ授業づくりを進めて，学ぶ意欲と学力を向上させる。	★	継続	・教科横断的な学びを進めながら，自己表現を進めた授業を展開し，学力の向上を目指す。 ・授業への効果的な ICT 活用と指導方法の研究を進める。	・生徒が主体的に思いや考えを伝える自己表現活動を取り入れた授業を構築する。 ・各教科の授業において，タブレットやデジタル教材を活用し，基礎学力を向上させる。	・アンケート調査①「授業で自分の思いや考えを表現できたか」，②「学び合いの授業でわかったと実感できた場面があったか」肯定的評価80%以上 ・アンケート調査「タブレットを使った授業で学習が深まった」肯定的評価80%以上	□各授業者が主体的な学びを展開した授業を意識的に行ってきたため，①88%，②96%であった。 □ICT パイロット校研修を取り組み，「授業で ICT を積極的に活用している」肯定的評価 80%	3	3	・教科だけでなく，道徳･学活･総合的な学習の時間等も有効的に活用し，自己表現できる場を増やしていく。 ・引き続き ICT を活用した複数教員の相互参観授業や研修を進め，教員が交流していくことでさらに効果的な授業内容を目指す。	◎全職員が授業研究を繰り返し行い，生徒主体の授業を構築してきた。全国学力調査において全国平均を上回る教科があった。 ①89%， ②96% □ICT パイロット校研修で効果的なタブレットの活用方法を模索してきた。「授業で ICT を積極的に活用している」肯定的評価 88%	4	4	4	・さらに生徒の学力向上を目指し，ICT の新たな使い方を学校全体で研修しながら取り組んでいく。 ・個々の生徒がタブレットに向かい合うのではなく，タブレットを通して思いや考えを交流し，お互いに成長していける授業を目指す。
2	児童・生徒の自己肯定感を高める。	★	継続	・生徒へ役割や活躍の場を提供することで，自信を持たせ，自己肯定感を高めていく。 ・自ら率先してあいさつができるようになる生徒を育てる。	・生徒が主体となった授業づくりや行事を展開し，生徒に「できた・やれた」という達成感を積ませる。 ・生徒会や部活動を主体として，あいさつの取組を進めていく。	・保護者アンケート調査「学級・学校に対する満足度」を９０％以上にする。 ・生徒アンケート調査「自ら進んであいさつができる」を90%以上にする。	□保護者へ生徒の頑張りを伝えきれずに，数値目標を達成することができなかった。 ８2.9% □生徒会，部活動の頑張りで数値目標を達成できた。91.2%	3	3	・生徒に今まで以上に授業や行事で成功体験を積ませる。 ・より生徒主体のあいさつの取組を進めていく。	□文化祭の復活やマラソン大会など，生徒主体の行事を増やした。数値目標を達成することはできなかったが，肯定的評価は上昇した。 86.9% ◎毎朝，毎下校時に生徒会が中心となりあいさつ運動を展開したことで，数値も上昇し，目標を達成できた。 96.6%	3	3	3	・来年度以降も生徒が主体となった活動を展開し，自己肯定感を高めていく。その中で，家庭との連携を密にしていく。 ・学校教育目標でもある，「社会に出て通用する」あいさつになるような活動を重点にする。

２	教職員の資質・能力の向上を図る。		継続	・学びについて共有・協働する教職員のための場（校外・校内研修）を充実させる。	・西部地区小中一貫教育の研修や自身が自主的に受講した研修，取組を他の教職員に広げたり，チームとして実践したりする。	・アンケート調査により「学校内の活動について，失敗を恐れず挑戦することができている」の肯定的評価が８５%以上	□ICT を活用した授業づくりでは，リーダーを中心に４つのチームを編成し，教職員全員を巻き込んだプロジェクトを推進し組織的に学力向上を推進している。アンケート結果93.3%			・自己の実践を教職員全体へ広げていく研修を意図的に仕組み協働する場をつくり，成果を共有する。	◎ICT を活用した授業づくりでは，４つのチームリーダーが牽引し，教職員全員が研究授業で相互参観し授業力が向上している。アンケート結果「81.3%」				・リーダー会やチームでの研修を定期的に実施し，日常的に学力向上について教職員間で対話できるようにする。
				・日々の仕事の中で生徒と学習面で向き合うことが実感できるようにする。	・平日１回，休日１回の部活休養日を徹底するために，土日の部活動計画を前月迄の承認制とする。	・生徒に対してじっくり話を聞き，考える手助けがよくできている教職員７０%以上 ・全員が，平日１回，土日１回の部活時間内とし，時間外勤務時間が月４５時間以内とする。	□業務の上でもICT を活用し，生徒と対話する時間を生み出せている。アンケート結果93.3% ・土日１回以上部活休業 98% 45 時間以内 43.9%達成	３	２	・ICTの活用と生徒面談を計画的に実施し，生徒と向き合う時間を生み出す。 ・中体連主催の大会以外で土日の部活動が連続しないよう,代替日も設定する。	□生徒の振返りをICT を活用したり，成績処理を迅速に行えるようマクロを改良したりして時間を生み出している。「93.8%」 □土日１回以上部活休業 95.2% 45時間以内67%達成し，少しずつ改善している。	４	３	３	・年度末には来年度に向けて業務の見直しと，時間割作成業務等を変更し，教職員の事務作業削減へつなげる。 ・中体連以外の大会参加等についても精査し，教職員・部員双方の負担を軽減する。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０%以上１００%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０%以上８０%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０%以上６０%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０%未満の達成度	目標を達成できなかった。